

総記

「総記」の執筆は、時の編集委員長が担当する例になつてゐる。しかし、そうすると現編集委員長には昭和五九・六〇年度の展望号(第一四五輯)と今回と、引きつづいて二度の執筆をわずらわさなければならぬことになるので、——現にそういう例も最近ありはしたが、やむを得ず代つてこれをお引き受けすることになつた。引き受けはしたけれども、このいわゆる展望号に「総記」という項目を立てる意味は、実は、余りよく納得できていない。

こういうかたちになつたのは、昭和三一年度の展望号(第三〇輯)からだから、すでに三〇年来の経緯がある。学界展望的な記事は更にはやく第五輯から掲載されているが、しばらくは、「国語学一般」という項目があつて、これが「国語史・国語学史」「方言学」「国語教育」「国語問題」などの項目で扱われるべきもの以外をすべて引き受けるといふ、守備範囲の広いものであつた。いわゆる「総記」の役割をも兼ねていたわけである。それが、右の第三〇輯にいたつて項目分けが「方言研究界」「国語史」「文法」「語彙・意味」「音韻・文字」「国語問題」「国語教育」「言語生活」と一挙にこまかくなり、その最初に「総記」という項目がおかれることになつて、以後ほぼこの形式が踏襲されてきた。(ちなみに季刊四輯のうちの一輯を以て展

阪 倉 篤 義

望号とすることも、この時に始まつたのである。ただし、第四九輯からは、二年度分を纏めて展望することになつた。) たまたま右の形式の定着しはじめた時、すなわち次の昭和三二年の展望号(第三五輯)の「総記」は、私が担当させられた。何をいかに書くべきかを編輯部に問合せた結果を文中につきのように記している。

さて、わたくしが執筆を命じられた「総記」というのは、以下「国語史」「音韻」「文法」「語彙」「方言」「国語問題」などの部門においてとりあげられるはずの諸論文をのぞいて、直接その何れにも入れにくい、あるいは入れてしまうことは適当でないと思われるものだけを扱うことになつてゐる。

つまり、この場合の「総記」というのは、圖書の分類法で言われるのと同じく、「ある特定の分野には属さず、全体にわたるもの」を意味したのである。ところが、実際に私がこの第三五輯の総記で扱っている内容は、必ずしも編輯部の意向に添うものではなくて、「計量国語学会発足のこと」「言語過程説批判のこと」「言語技術をめぐる座談会のこと、など」という三つのトピックスについて述べることでお茶を濁している。各方面にわたる論文に広く目を通して、

右の条件にかなうような超项目的あるいは非项目的問題を扱った論文を集めることが、まず容易ではなかったのと、また、たとえそれが揃えられたとしても、自分の識見の狭さを考えると、これについて正当な意見を述べ得る自信などはなかったからである。そして、この事情は、むしろ今日においても少しも変わっていないのみならず、さらに現在は、本号について見られるように、項目がいよいよ細分化され、増加している。この拡張された網にも収まりきらないものというのは、極めて広大なスケールを持った（したがって、私などの手におえない内容の）大規模な論文か、あるいは逆に極めて特殊瑣末な問題を扱った（したがって取上げるに及ばない）小論文か、その何れかに属するものである可能性が、ますます大きくなってきていると言えるだろう。

もつとも、「総記」という語には、いま一つ、「全体を総括する記述」という意味がある。現在の「総記」という項目は、むしろ、そういう意味のものととして巻頭におかれることになっているのかもしれない。もしそうだとすると、私はここに、特に昭和六一・六二の兩年を限って、その間に見られた国語学界の動きというべきものを総括し、そこに見られる特徴的な面を捉えて、その意味づけをしなければならぬことになる。

偶然、遺物が発掘されたとか新薬が発明されたとかいうと、すぐ、「○○研究は、ここにおいて根本的反省を迫られることになった」とか、「××学は今や大転換すべき段階にきた」とかいう言い方を、ジャーナリズムは、好んでする。しかし、すくなくともわれわれの学問の場合、こういうセンセーショナルなもの言いは慎むべきである

う。たしかに、「国語学」という学問は着実に進展しつつある。理論的な面においても、現象の解釈においても、あるいはまた、たとえば角筆文書の発見というような資料面に関しても、新しい仮説が示されたり、コンピューターの利用というような新しい手段が試みられたり、従来の考え方に修正が加えられたりしている。しかし、それにも拘らず、大きく言えばそれらはやはり、これまでの学問の静かな発展であり継承なのであつて、国語学の流れそのものが一年や二年の間にこう変化した、などとは、到底言えそうにない。いわゆる言語学界のこととして述べたものではあるが、

戦後の言語学界は、言語理論の新しいものが出ると、それが言語研究そのものを一変させるようなものだと言つて錯覚する風潮があつたのではないか。言語学理論は言語学の一つの特定分野と考えた方がよいということが言えそうである。

という渡部昇一氏の意見（『国語年鑑』昭和61年版）に同感したい。

このことと多少のつながりのありそうな面白い話を最近耳にした。日本の大学で言語学科を卒業して今から三〇年ほど前に言語学で有名な米国のある大学に留学し、そのウラル・アルタイ学科博士課程を終了後博士号を得てからもずっと米国に住んで日本語や女真語の研究で業績を挙げ、現在向こうの大学の教授をつとめるKという人がいる。この人が昨年、かねて想を練っていた現代日本語の文法を体系的に説いた一書を纏めて、日本のある書店（日本語構文論関係の書物の出版で知られている出版社）に出版のことを打診してみた。ところが返事は否定的で、その理由は、「当社は言語学の本なら出しますが、こういう国語学の本はどしても……」ということであつたそう。K氏のその著は、形態論に力を注いで、歴史的な観点

をも取入れた、ガッチリした論述方式のもので、むしろ言語学論文ふうのものである。なかには特異な説も提出されていて、必ずしも一般向きではないから、出版できないとする本当の理由は別にあったのかも知れないのだが、しかし少なくともその表面的な理由が、「内容が国語学であつて、言語学ではないから」という言い方できごとではないし、また、私の直接経験したことではないから多少事実と相違しているかもしれない。しかし、構文論ばやりの現今の学界の風潮の反映として、いかにもあるべき、かしいことのように思われるからである。しかもまた一方では、「この頃の文法の論文は、あれは半分は随筆ですよ」などという傍観的な批評も聞かれるという。こういう無責任な放言を許さないためにも、われわれはせいぜい自戒しなければならぬのではあるまいか。

右のようなことは一応別にしても、国語学と言語学とが区別して考えられるという明治以来の奇妙なしきたりからは、そろそろ脱却すべきときである。現代語研究の方面では既にそれが程度実現して、いわゆる国語史の部門が独り「国語学」の孤塁を死守しつづけることになる、というような誤解もあるらしいが、事実において、国語学者という、日本語を直接の研究対象とする言語学者と、英語や独・仏語あるいはまた中国語・朝鮮語等を研究対象としている言語学者との協同作業は、一方で着々と進行しつづつある。たまたま私が直接に見聞することのできた範囲内でも、たとえば六二年一月二〇日から四日間にわたって国立民族学博物館で催されたシンポジウム「日本語の形成」では、北方諸語、チベット・ヒルマ諸語、アルタイ諸語、オーストロネシア語族、アイヌ語、中国語、朝鮮語

を各専攻する内外の言語学者及び民族学者に国語学者二名が加わつて、計一〇の発表が行われ、他の討論者をもまじえて熱心な議論が交わされた。日本語の系統論は依然として諸説紛々であるが、右のは、古代日本語というのは既にピジン・クレオール化が進んでいて、複数の言語を基本的要素として含みつつ形成されていたためではないか、という考え方に立つての日本語成立論議であつて、むろん直ちに結論の出るはずのない問題であるが、数々の示唆に富む意見が聞かれた。また同じ年の五月二〇日から四日間神戸大学で開催された日本学術振興会の「日本語統語論セミナー」では、二〇名ほどの日本人及び日本在住外国人学者と、九名ほどの米国人及び米国在住日本人学者とが集まり、それぞれに異なる立場を越えて、実りのある話し合いを重ねた。日本語統語論を中心にしたセミナーには違いないけれども、これらになると、もはや、そもそもこれは国語学界のことなのか言語学界のことなのか、などと区別して考えることが無意味になってしまう。あい前後して二月二・三両日東京で行われた「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会主催の「日本語の特性と機械翻訳」、あるいは六月六日に開催された言語学会94回大会の「社会言語学の理論と方法―日本と欧米のアプローチ」というようなシンポジウムについても、右と同様あるいはそれ以上に、こうした思いを深くさせられるであろう。開かれた日本語学の時代が既に来ていると言えそうだ。

神戸のセミナーの最終日にも、C・J・ファイルモア教授、久野暉教授等四人の講師による「米国における日本語研究の動向」という講演が行われたのだが、いわゆる国際化時代を反映して、外国における日本語研究や、外国人に対する日本語教育のことが、ここ一二年

はいよいよ関心を呼ぶ問題になってきた。日本語教師養成あるいはその資格認定というような臨牀的なことに関しても、国語学界に期待されるところが、いまや急激に増加しつつある、と言えるだろう。

以上、管見の及ぶかぎり、学界のやや周辺の動きについて思いつくままに感想を述べた。国語学界内部の、この二年間における価値ある成果と、その意味づけについては、すべて以下の各項目において詳しく述べられるところに譲るが、真剣な努力を以て調査・執筆されたであろうそれら各項目の前書きとして、このような随想めいた文章をおくことの不適切さを思うて内心忸怩たるものがある。

最後に、国語学会に限って言えば、この三年間、春秋二季の研究発表会並に講演会の会場を御提供くださった六つの大学の関係者各位、学会の大会運営委員・編集委員をおつとめいただいた諸氏、及び現在進行中の「国語学研究文献総索引」編集に御協力を賜っている多数の方々に、この機会をかりて厚く御礼を申しあげます。

——代表理事——